

こころ

発行
城南区人権啓発連絡会議

事務局
城南区役所
生涯学習推進課
TEL 833-4044

第24回 城南区人権を考えるつどい

難病を乗り越えて〜光のステージへ〜

エスペランサトークコンサート

平成二十八年七月八日(金)、エスペランサによるトークコンサートが城南市民センターにて開催されました。これは第二十四回城南区人権を考えるつどいとして、城南区人権啓発連絡会議、城南区役所が主催したものです。

当日は小雨模様でしたが、会場は多くの参加者(約四百人)でにぎわいました。

奥田良子さん(フルート・オカリナ)と夫の奥田勝彦さん(ベース)の二人で結成された「エスペランサ」。ちなみに、「エスペランサ」とは、ラテン語で「夢・希望」を意味します。

難病や障がいのある人たちへの理解を呼びかけながらのコンサートは、公演回数も千回を超え、平成二十五年には念願の全都道府県での開催を達成



美しい演奏を聴かせてくれたエスペランサのお二人

音楽家を目指していた良子さんでしたが、二十一歳の時に、体重が一カ月に十五キロ減り、髪が抜け落ち、ついには起きあがれなくなり、病院でクローン病と診断されます。主治医から「二生治らない病気、でも死ぬことはない」と告げられ、彼女は生と死を考え始めます。クローン病は腸に潰瘍ができやすく、お腹がとても痛くなる病気です。音楽家になる夢を捨てきれない良子さんは、絶食治療をしますが腸閉塞も発症。手術を何度も受けますが、次第に頑張る

力をなくしてしまします。良子さんは「夢と目標をなくした時が人生で一番つらかった。でも今考えると、その時が一番頑張っていた時かもしれない。そして少しずつ前に向かって歩んでいたのだ」と振り返ります。

挫折から再生へ

やがて転機が訪れます。二十一年前の阪神淡路大震災に遭遇した良子さんは、犠牲になられた多くの方を目的のあたりにして、自分が生きていくことに感謝し生きる決意を新たにします。そして、多くの方のサポートを受け、ステージに戻ってきました。「しんどい時があったからこそ、今がある」と語る良子さん。大好きな歌曲「ローズ」の歌詞にその想いを寄せながら素敵な演奏が続きます。

コンサートの最後に、クローン病などの内部障がいは一見して障がいかわりにくいので誤解や偏見も生みやすいこと、そのため「少しでも関心をもってもらえればうれしです」と訴えられました。「夢はあきらめないでいれば必ず叶います。そして今、生きていることに感謝したい」という言葉でコンサート

病気との闘い

今回の公演は、まず東日本大震災をきっかけに作曲された「花は咲く」からスタート。続いて「秋夜」「おぼろ月夜」などの名曲や懐かしい曲が続き、聴衆もじつと聴き入ります。オカリナやフルートの澄んだ音色が会場全体に響き渡るなか、良子さんが語りはじめます。

音楽家を目指していた良子さんでしたが、二十一歳の時に、体重が一カ月に十五キロ減り、髪が抜け落ち、ついには起きあがれなくなり、病院でクローン病と診断されます。主治医から「二生治らない病気、でも死ぬことはない」と告げられ、彼女は生と死を考え始めます。クローン病は腸に潰瘍ができやすく、お腹がとても痛くなる病気です。音楽家になる夢を捨てきれない良子さんは、絶食治療をしますが腸閉塞も発症。手術を何度も受けますが、次第に頑張る

は終了。感動の余韻が会場にあふれ、まさに「夢・希望・勇気・生きる幸せ」を伝えてくれた九十分でした。

参加者の声

● 快活なお話のなかにも人生について考えさせられるような深みもあり、とても楽しかったです。

● 途中、涙が止まりませんでした。心に響く素晴らしい語りとおカリナの澄んだ音色、決して忘れません。

● 心温まる演奏とご夫婦の温かい絆を感じながら、人権について考え、関心をもつきっかけになりました。

クローン病とは

一九三二年にはじめて報告され、厚生労働省により難病に指定されています。主として若年者にみられ、口腔から肛門までの消化管のどの部位にも炎症や潰瘍が起こりますが、小腸と大腸を中心として特に小腸末端部によく現れます。非連続性の病変を特徴としていて、それらの病変により腹痛や下痢、血便、体重減少が生じます。日本の患者数は平成二十五年には約四万人を数え、増加傾向がみられています。
(難病情報センター解説より)

平成28年度 福岡市人権尊重週間入選作品

城南区内のみなさんの標語とポスターの入選作品を紹介します。

- いじめるな やるなやらずな 見のがすな**
別府小学校・5年 井上全朔さん
- 始めよう その人だけのよさ見つけ**
堤小学校・5年 郷原純一郎さん
- 広げよう 悲しみじゃなくて 思いやり**
別府小学校・6年 石橋優那さん
- 気にかける 一人ぼっちのあなたの背**
堤小学校・6年 寺田有希さん
- 見分けよう やっていいこと 悪いこと**
堤丘小学校・6年 井手聡一朗さん
- 人はみな ちゃんと名前をもってるよ**
七隈小学校・5年 森光ゆうさん
- 友達と 笑いあうとき ポカポカだ**
堤丘小学校・6年 田口ひなたさん
- なりたいな 人の幸せ 喜ぶ私**
鳥飼小学校・5年 井筒美結さん
- いじめはね 君もあの子も 苦しいよ**
田島小学校・5年 一ノ宮奏さん



堤小学校 3年1組

平成28年度 城南区人権啓発連絡会議の活動

総会・委員研修会

城南区人権啓発連絡会議の総会を六月二十四日(金)、城南市民センターで開催。役員選出、二十七年事業報告、平成28年度事業計画を審議し、承認されました。

総会終了後、委員研修として、大牟田市駒馬南校区社会福祉協議会会長の汐待律子さんによる講演会「二人の百歩より一人の一步のまちづくり」を開催しました。

汐待さんは地域でネットワークをつくり、認知症の高齢者やその家族を支える活動を十年以上続けておられます。だれもが住み慣れた町で安心して暮らし続けるための地域の共助力を高める具体的な取り組みや、「自分たちの地域は自分たちでつくる」という住民パワーが地域づくりに大切なことである等のお話を聴き、人と人との繋がりの大切さを改めて考える機会となりました。

街頭啓発



十二月二十八日(月)に、城南区役所地下鉄別府駅周辺やマルキョウ東油山店の駐車場周辺の二会場に分かれて街頭啓発活動を行いました。城南区人権啓発連絡会議の委員など二十八名が、寒空の中、買い物客や通行人に人権尊重週間の周知や十二月七日(水)の「人権を尊重する市民の集い(城南区会場)」への参加を呼びかけました。

活動内容

- 6/24 (金)** ◆ 総会
・役員選出
・平成27年度事業報告
・平成28年度事業計画
◆ 委員研修
・講演会「二人の百歩より一人の一步のまちづくり」
講師 汐待律子(大牟田市駒馬南校区社会福祉協議会会長)
- 7/8 (金)** ◆ 城南区人権を考えるつどい
「難病を乗り越えて〜光のステージへ〜」
エスペランサトークコンサート
- 10/3 (月)** ◆ 第1回運営委員会
・人権尊重週間の街頭啓発の取り組みについて
・「城南区人権を考えるつどい」の結果について
- 11/28 (月)** ◆ 人権尊重週間街頭啓発
・福岡市人権尊重週間行事周知及び「市民の集い」PR(チラシ等配布)
講師 角岡伸彦
(ノンフィクションライター)
- 12/7 (水)** ◆ 人権を尊重する市民の集い
・実践報告
・「広報紙から広がる人権」探り、学び、伝える」
報告者 人権を考える会へん(別府校区人権尊重推進協議会)
講演「部落問題のこれから」
講師 角岡伸彦
- 2/6 (月)** ◆ 第2回運営委員会
・平成29年度総会に付議する事項について
・広報紙「こころ」の発行について
- 3/15 (火)** ◆ 広報紙発行
・城南区人権啓発連絡会議だより「こころ」第27号発行
(区内全戸配布)



第45回人権を尊重する市民の集い

平成二十八年十二月七日(水)、今年で四十五回目になる「人権を尊重する市民の集い(城南区会場)」が城南区市民センターで開催されました。当日は寒い天候にも関わらず、三百八十八人が参加し、実践報告と講演に聞き入りました。

講演会 「部落問題のこれから」
ノンフィクションライター 角岡伸彦さん

講師の角岡さんは、一九六三年兵庫県加古川市の被差別部落に生まれ育ち、大学卒業後、神戸新聞社へ入社。記者として勤務後フリーとなり、現在はノンフィクションライターとして活躍されています。

角岡さんが感じている部落という存在への異和感(他の差別問題とは違う、不思議さ・やこしさ)について、手作りの大判紙に描かれたキーワードを示しながら、わかりやすく講演していただきました。

これまでの部落問題

なぜ、部落問題が残ってきたか、誰が部落を残したか。明治以降の一五〇年を振り返りました。

一八七二年(明治四)解放令

制度上の賤民はなくなった。本来は、



やさしい語り口の角岡さん

環境改善に取り組んだ。この同対事業は、何度も延長され、また法律の名称を変え、二〇〇二年まで継続され、三十三年間でおよそ十六兆円が支出された。一方で、一定の区域だけに、長期間にわたり住環境の整備や奨学金の給付、就労保障がなされ、「なんであそこだけ」という周辺地域住民の意識を生んだ。

ここで差別はなくならなければならなかったのだが、華族・士族・平民・新平民という新たな制度ができた。

一九二二年(大正二)水平社

部落の人々が差別に抗議するために立ち上がり、全国水平社を結成した。目指すべき平等な社会を表現する「水平」という言葉からその名が付けられた。部落民自身が声を上げることが重要であると考へ、自ら「どこ」と「だれ」を明らかにしたのである。角岡さんのふるさとも、全国水平社創立の翌年に「北別府水平社」が結成された。

一九六九年(昭和四四)同対事業

十年の時限立法で、同和对策事業特別措置法が施行された。部落解放運動の成果として実施された同対事業は、同和地区を範囲指定した上で、住宅や道路の建設、奨学金の給付や就労対策など多岐にわたる。



一九七五年(昭和五〇)部落地名総鑑

全国の部落を網羅した図書が密かに高額で販売されていることが明らかになった。部落の「どこ」に関する情報を知りたい者が現れたのである。「どこ」「だれ」を割り出すためである。これは想像に難くない。

一九九五年(平成七)インターネット

インターネットの爆発的な普及によって新たな局面を迎えている。掲示板等への差別的な書き込みが広がっている。表現の自由をたてに、ほとんど無法地帯といえる場になりつつある。このような現状を背景に、今国会で、部落差別解消推進法が衆議院で可決され参議院へ送られている。いろんな取り組みで部落差別はなくなってきたが、インターネットの普及で部落差別が再発し始めている。これを踏まえて、部落差別解消推進法では、啓発事業の必要性が改めて述べられている。

これからの部落問題

誰が部落を残してきたのか。差別する人がいるから部落が残ったのは言うまでもない。では、何をなくし、何を残していくのか。

文化・人

賤民身分の人が動物の処理を任されていた歴史もあり、部落の中に屠畜場など牛・馬・豚を屠畜

する仕事生まれ、肉を使った料理がある。ホルモン料理やサイボシ(馬肉の燻製)、油かす(牛の腸を炒ったもの)等の食文化である。牛皮を使った太鼓や皮製品などもあり、日本人の生活文化の一端を担ってきた。文化を創るのも伝えるのも人である。どんな人を残すのか。無関心を決めこまないで、関心を持って部落問題への理解を深める人を残していく。

差別する人を残してはいけない。

差別される人を残してはいけない。

「部落差別解消推進法」が成立しました。

平成二十八年十二月九日成立。「部落差別」の言葉を冠した初めての法律で、国や自治体の責務として相談体制の充実や教育・啓発、実態調査の実施を明記しました。

参加者の声

- インターネットでの回答はすぐ返ってきます。それが正しいか判断する間もなく頭にインプットされます。本当に「寝た子を起こすな」では誤った知識を得てしまいます。子どもたちを人間として生きていく道を、やはり人権を見つめる週間が大切だと思います。
- これほどしっかりと同和問題を考え、聴けたことはなかったような気がします。講師の先生に感謝します。
- 子どもたちは学校で学ぶ時間をもっていますが、二十代・三十代日々忙しくしている中、なかなかこういうイベントの存在も知らず、人権について考えることもない世代にどう啓発していくかが現実的な問題解決の手掛かりになるのではないのでしょうか。
- 解り易く腑に落ちた内容でした。今までの部落問題の講演会と切り口が違ったのでとても良かったです。

編集後記

昨年の人権を考えるついでには、エスペランサさんの力強い言葉と、やさしい音色に心を打たれました。演奏された「ローズ」の歌詞に「覚えておいて冬深い雪の下に眠っていたその種は、春太陽の愛をうけてバラの花を咲かせることを」とあります。希望を持っていればいつか叶うということをお忘れずにいたいです。

現在も世界中で差別や偏見にまつわるニュースが後を絶ちません。このような時こそ、私たち一人ひとりが人権を大切にすることを失わないようにしたいと思います。

実践報告

「広報紙から広がる人権～探り、学び、伝える～」

報告者/人権を考える会べふ(別府校区人権尊重推進協議会)

「人権を考える会べふ」は、平成二十五年六月に、福岡市で一四四番目に設立された最も新しい人権尊重推進協議会です。「YELL」という広報紙づくりを活動の柱とし、毎月の定例会では活発な意見交換が繰り返されています。

実践報告は、映像と音楽で幕を明け、人尊協委員による寸劇が始まりました。

五人のメンバーが定例会の様子を再現し、イメージキャラクターづくりや、身近な人権問題から学習を始めたことなど、設立時から活動の方向性が定まるまでを楽しく演じました。

その後、副会長の吉良文江さんから、広報紙づくりの過程で人権について学んだことや、「人権かるたづくり」をする上で、住んでいる町の



ことや地域の歴史を知ろうと「べふウォッチ(ウォークラリー)」を実施したことなど、活動の紹介がありました。今後の目標として、二人でも多くの人に人権意識を自分のものとして感じてもらえるような活動を続けていきたいとのことでした。

今回の実践報告は、広報紙を

つくることから学び、伝え分かつくこと、そして人権意識を広げていく上で、地域の人たちと一緒に行動することが大切なことである、ということを実感できる報告でした。

参加者の声

- 別府の発表良かったです。住民が寸劇等やると興味がわいてきます。皆様の頑張り見習いたいです。
- 別府校区の取り組みは大変分かり易い。人権カルタという入口があることで楽しい印象がありました。
- 実践報告は立派なプレゼンで広報紙も良く工夫されていた。人権についてはメンバーが自分自身のこととして何を学んだかをもっと聞きたかった。



寸劇の様子

